



共生の時代

'11
4月

●発行:グリーンコープ共同理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号 カーニープレイス博多4階 TEL092 (481) 7923 FAX092 (481) 7876



生活応援ワーカーズ かがやき 代表

江戸 良子 さん

日 常の居場所はグリーンコープ生協においた高城店の2階にあるふくしサービスセンター「であい・ふれあい」。陽光が射す一室から笑顔で一日が始まる。

ワーカーズの設立は1996年だった。グリーンコープが福祉に踏み出し、グリーンコープ生協おいたでも家事支援ワーカーズ立ち上げのための学習会を開催した。江戸さんはそれに参加。その参加者の中から13人でワーカーズを組織し、家事支援ワーカーズ「であい」を立ち上げた。「といつも特別な福祉に関心があったというわけではないです。当時、体調をくずした義母と同居しており、いつも一緒に、それが時に息苦しく。その時たまたま学習会のことを聞いたのです。自分が外に出て他人の家事支援に携わり、代わりに義母には別のワーカーに関わってもらう。なかなかいいアイデアではないかと考えた。ところ

が義母は設立からほどなくして急逝。ワーカーズによる家事支援は大分初というところで設立総会の模様はTVでも放映され、それを見て「良子ちゃんが出てくる!」と喜んでくれた矢先だった。

子育てが一段落しているということで代表を引き受けた。その後2000年、介護保険制度スタートと同時に訪問介護分野も手がけ、2005年には同じ大分市の東部で活動していた「ふれあい」と合併。2006年には社会福祉法人グリーンコープに合流した。現在は博多市全域をカバーし、ワーカー数も88人という大所帯となった。

「本が毎日書けるほど」いろいろなことがある。特に支援を必要としない家庭でも、家事を担っている人が倒れるとたちまち混乱に陥る。掃除、料理、産前・産後のケア、保育園の送迎など、ごく当たり前に思える「家事」だが、地域での支えあいが失われている今は役に立つのだと実感す

る。

さまざまな出会いを経験してきた。利用者が高齢の場合、介護の終わりはその人の死だ。辛いことには違いないが、いつしか「自然なこと」と受け止められるようになった。むしろそれまでの日々の交歓を感謝し、その人らしい生が最期まで保てるよう「精一杯お世話させていただいた」という思いが胸を満たす。

心がけていることがある。「無理をしない」こと。サービスは家庭との両立がうまくいって初めて成り立つ。同時に相手を「ゆるす」ことも大切だと感じている。誰でも間違えるし、失敗する。それはきちんと反省するが、引きずらない。笑顔でゆるしあう関係を作ること。それが「であい・ふれあい」のカラーだ。

責任者として走り続けて15年。世代交代をそろそろ意識しつつ、「私たち世代の同窓会を作ろうかな」と発想する。卓越したバランス感覚は天性のものだ。

プロフィール

大分県大分市生まれ。夫、長男、二男（共に社会人）の4人家族。介護福祉士、栄養士、保育士の資格を持つ。社会福祉法人グリーンコープ ふくしサービスセンター「であい・ふれあい」管理者・サービス提供責任者。グリーンコープ生協おいた組合員

人間関係の極意は「ゆるしあう」「こぞ

グリーンコープ生協ふくおか「GMナタネ抜き取り隊」活動中!!



博多港周辺で自生ナタネの抜き取りをするグリーンコープ生協ふくおかの組合員

Contents

グリーンコープは東北地方太平洋沖地震被災者の皆さんへの支援に取り組みます 2

うちのメーカー・うちの生産者 ⑬
雪印メグミルク（株）産直びん牛乳 3

第6回GMOフリーゾーン全国交流集会 in 阿波
GMOフリーゾーンをもっと広げ、私たちの食べものと生物多様性を守ろう! 4・5

お米と野菜を食べよう! —1—
「お米と野菜を食べよう!」スタート集会開催 6

なたね・落花生の生産者に生産奨励金を届けました 7

春は新しいスタートの季節です。私も大きく様変わりをする春を迎えています。これまでの経験を糧に、新しいことにチャレンジをするつもりです。私に務まるのかと気が重い部分60%、新しい環境への期待が40%ぐらいの割合です。よっか。

これまでもさまざまな転機を迎えてきたはずですが、概ね能天気な私は、あまり深く考えることなく次のルールに乗っかってやり過ぎて

送 信

してきたようです。グリーンコープの活動に関わるようになって、その時々局面で意見を求められることが多々ありました。面倒くさいと思う一方、結局そのことも含めてその時点の自身の所在でしかないなあ、と、あえて反省と自己肯定の日々です。

気落ちせず「私は私」に安住せず、気持ち弾む春に向かっています。

グリーンコープ生協ふくおか理事長 坂口 陽子

グリーンコープは東北地方太平洋沖地震被災者の皆さんへの支援に取り組めます



第一便の出発式。10tトラックには緊急救援物資が満載された。右端は先遣隊に思いを託すグリーンコープ共同代表理事の田中裕子さん



3月15日に米沢市役所に第一便の緊急救援物資が届いた



第一便で送られた救援物資



(株) きとうむらから送り出された水



3月11日、東北地方を襲った世界観測史上最大級M9の地震による被害状況が、日が経つごとに明らかになってきています。そんな中、いつまで続くか分からない困難な状況を、助けあって乗り越えようとしている被災地域の皆さんの姿に日本中が心を動かし、支援の輪が広がっています。

未曾有の被害に見舞われた被災者の方々へ何ができるのかを考え、3月14日にはグリーンコープからの緊急救援物資と、どのような支援が必要なのか現地の情報を掴むために先遣隊として職員3人を派遣しました。すべての生命に寄り添い、助けあい、支えあう社会を、地域をめざしてきたグリーンコープだからこそできる支援があると考えています。

復旧に向けての懸命な取り組みがはじまった被災地で、グリーンコープは組織的な支援活動に取り組むことにしました。被災者に思いを馳せる40万人の組合員の思いを現地に届ける取り組みをすすめていきます。長期化が予測される支援を継続していくために、グリーンコープの事業もこれまでどおり着実な歩みを続けながら支援活動を続けていきます。

**緊急カンパに
取り組みます**

詳しくは、3月14日と21日から2週続けて配布されたチラシをご覧ください。3月21日～4月9日の3週間、注文書に申し込み番号と数量を記入してください。集まった募金は日本赤十字社を通して、現地にお届けします。

**緊急救援物資を
継続的に送ります**

地震発生後の3月14日に第一便の救援物資（飲料

水、食品、毛布など）を10tトラックで送り出しました。生活クラブやまがたと山形県米沢市役所へ届けました。

福岡物流センターで行われた緊急救援物資第一便と派遣する職員の出発式では、グリーンコープ共同代表理事の田中代表理事から「現地のみなさんの厳しい状況に対して、少しでも協力したい」という私たち組合員の思いを届けてください」と40万人の組合員の思いを託しました。

次いで翌日には取引のある徳島県那賀町（旧木頭村）の（株）きとうむらにグリーンコープが要請し、飲料水18L×5,000本を10tトラックで送り出しました。被災地で一番求められているもののひとつが水です。出荷できる限り届けていく予定です。

3月17日には、引き続き飲料水3,000本とGCかぼすドリンク15,000本も送り出しました。グリーンコープの他の取引先から物資の提供の申し出や、運送会社などの協力も次々にあります。組合員

**支援物資を
組合員から募りました**

組合員の家庭内にあるもので、現地に必要とされている物資（毛布、タオル、防寒着、下着類、乾電池など）の提供を呼びかけ、被災地に届けます。

**人的・物的支援も
行います**

現地で物資などを運搬するためのトラックと支援を行う人員の派遣も準備がで

き次第すすめます。友誼団体である生活クラブ生協を通して、必要などころに必要な物資を届けます。

また、ホームレス支援の全国ネットワークによつて、仙台市、盛岡市で炊き出しなどの支援が行われています。社会福祉法人グリーンコープ副理事長の奥田知志さんを通じて、その支援をグリーンコープも協同して行うことになりました。その現場にプロパンガスなどの燃料や食料の支援を行います。

グリーンコープの支援物資は続々と現地に届けられています。最新の情報については、随時ホームページでお伝えしていきます。引き続き、共生の時代5月号でも報告する予定です。

うちのメーカー

106

福岡市南区
雪印メグミルク(株)

うちの生産者

ほんものの味を
届けたい

産直びん牛乳



グリーンコープのびん牛乳は、「経済効率優先の商品」を「生命を育む食べもの」に戻そうという組合員の思いをカタチにしたものです。

2003年11月、当時33万人の組合員と、生産者、メーカーと共に作りあげた産直びん牛乳の誕生から8年目を迎えました。びん牛乳開発を通じてグリーンコープとの信頼関係をより強く築きあげてきた雪印メグミルク(株)(以下、メグミルク)の産直びん牛乳専用工場があるメグミルク福岡工場を訪ね、工場長の酒井建次さん、生産課長の山本淳さん、営業促進課の八重樫毅さんにびん牛乳の製造や、組合員との交流を通しての思いなどを聞きました。

ほんものの牛乳をめざして

びん牛乳が誕生するきっかけは、「より自然に近い牛乳を子どもたちに飲ませたい」という母親の思いだった。1960年代、加工乳が氾濫する中、乳脂脂肪分を抜き、代わりに植物油脂肪などを添加するという事件が発生した。そんな中、前身生協時代の母親たちが「ほんものの牛乳」への取り組みをはじめた。まず成分無調整の牛乳を開発。次いで1985年には72℃15秒で殺菌するパステライズ牛乳、1988年ノンホモパステライズ牛乳、そして1998年、日本で初めてのnon-GMO飼料を食べた母牛から搾った牛乳を誕生させた。

さらにもう一段「ほんものの牛乳」に近づけるために、生乳本来の風味を損なわず、環境にやさしいリユースびん容器への切り替えを試みる。その思いに応えてくれるメーカーを探していたところ、当時の雪印乳業(株)(現メグミルク)と出会った。

新生「雪印」の誕生

雪印の歴史は1925年、北海道からはじまった。創業の精神である「健土健民」酪農は土の力を豊かにし、その土地の生命を輝かせてくれる。そこから作り出された牛乳や乳製品は最高の栄養食品として健やかな精

神と身体を育む」をモットーに、酪農から生まれるバター、チーズをはじめとする数々の乳製品を作り出してきた。しかし、2000年に起きた「食の安全性」を揺るがす食中毒事件から度重なる不祥事で解体再編に追い込まれる。雪印は酪農を原点とする創業時の精神に立ち返り、生産者と消費者と共に歩む新生「雪印」として出直しを決断。2003年1月、「雪印」の市乳部門、「全農直販」、「ジャパンミルクネット」が合併して「日本ミルクコミュニティ(株)」を立ち上げた。

開発から学んだ 消費者の目線

2001年に誕生した「生乳たつぷりヨーグルト」は、グリーンコープと雪印との開発商品だ。①non-GMO牛乳②nonホモゲナイズ③non香料④non安定剤。これら「4つのnon」を元に作られた。「このヨーグルトの開発でグリーンコープさんの『食べもの』に対する姿勢

品質を保つための 細やかな工夫

グリーンコープのびん牛乳は一般の超高温(120℃130℃2秒)殺菌(UHT)と比べ、低温のパステライズ殺菌であることから、生乳の性質を損なわず、風味や栄養素を残すというのが大きな特長だ。「UH

びん牛乳に対する 思いが共鳴して

工場の内部はすべてガラ

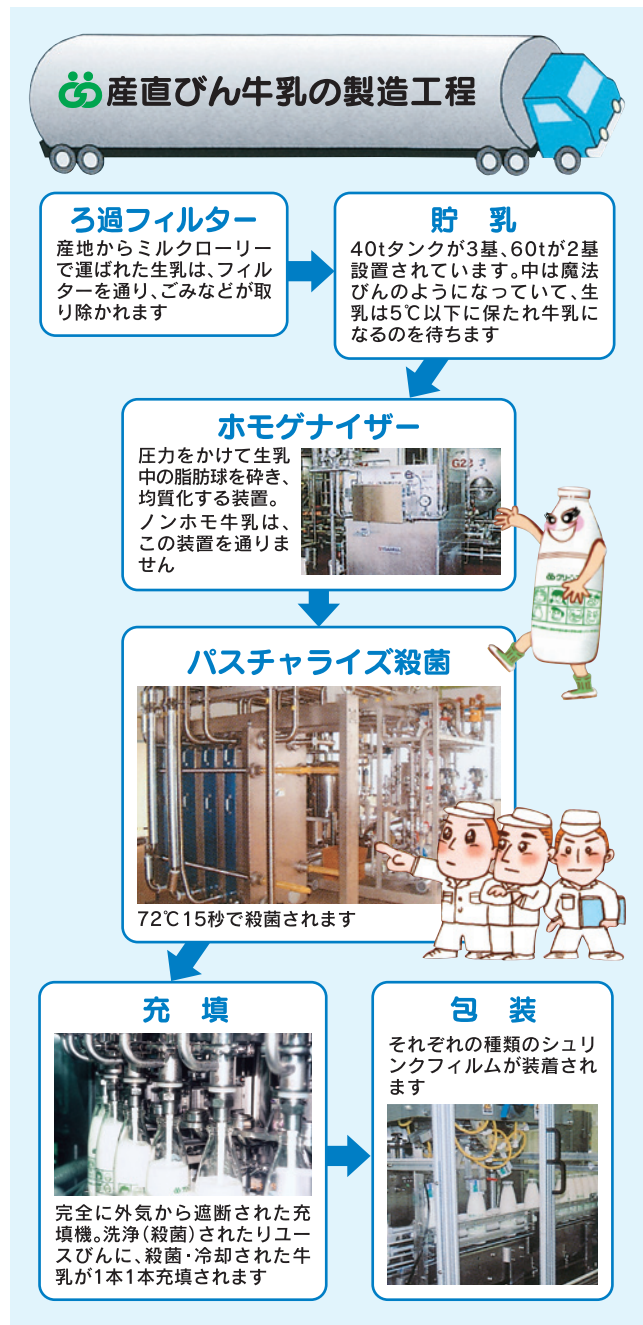
ス張り、中のような一見瞭然。安心・安全が目で見える。見学に来られる組合員さんに「ちゃんと作ってもらっているんだ」という感想をよくいただきます。皆さんとても熱心に説明を聞かれ「食べもの」に対するこだわりが伝わってきます。説明している私たちもとても嬉しい」と酒井さん。「これからも私たちは『安全』を提供し、皆さんに『安心』を実感してもらいたい。今までグリーンコープさんと構築してきた関係を大切にしていきたいな」と作っていきなさい」と変わることを思いを語った。

※1 2011年4月より日本ミルクコミュニティ(株)より改称

※2 一般的な牛乳の殺菌方法である超高温殺菌のようにすべての菌を死滅させず、生乳本来の栄養分や、風味をなるべく損なわないような殺菌方法

※3 ノンホモゲナイズ＝脂肪球を均質化していない

※4 遺伝子組み換えでない



・ゾーンをもっと広げ、 食べものと 生物多様性を守ろう!

「生命・暮らし・自然を守る」を脅かすものとして、グリーンコップは生物の遺伝子进行操作する「遺伝子組み換え(GM)」に一貫して反対運動を続けています。その具体的な取り組みの一つが、遺伝子組み換え作物を作らない地域を広げる「GMOフリーゾーン運動」です。

2005年に滋賀県高島町で第1回全国交流集会が開催されて以降、毎年一度開催されています。2011年2月26日・27日、徳島市で全国から約450人(グリーンコップから38人)が参加して「第6回GMOフリーゾーン全国交流集会in阿波」が開催されました。パレードと全体会のようすを報告します。

全

体会は、開催地徳島のコップ自然派など8団体で作った実行委員会の委員による「農業が直面する課題は多いですが、情報交換、お互いの成果を総括・共有し、世界中にフリーゾーンを広げるための団結の場にしましょう」の挨拶からはじまりました。

「コウノトリを野生に帰す」を合言葉に

特別報告の一つとして、兵庫県豊岡市長の中貝宗治さんが、環境と経済が共鳴する取り組み「コウノトリと共に生きる」豊岡市の挑戦」を報告しました。

狩猟や戦争、巣となる松林の伐採、農薬などによって、1971年、野生のコウノトリが豊岡から姿を消



中貝宗治さん

しました。1965年、絶滅の危機感からはじめた人工飼育には膨大なエネルギーと時間とお金が必要でした。25年目によりやく雛が孵り、2005年最初の放鳥が行われ、コウノトリを念願の野生に帰すことができました。

コウノトリは大型の肉食の鳥で食物連鎖の生態系ピラミッドでは頂点に位置します。それが野生で生きるためには、豊かな自然とそれを育む人の側の意識(文化環境)が必要です。

「コウノトリを野生に帰す」

「取り組みは、人間にとっても素晴らしい自然環境と文化環境を取り戻すことになるのです。そのために、小さな生き物が息できるようなビオトープ水田や湿地づくりを行政が率先して行ってきました。また、「コウノトリを育む」有機・減農薬米の取り組みを通して、農家だけでなく買い支える人たちが子どもたちの意識も変わりました。

2004年に豊岡市は環境経済戦略を策定しました。コウノトリの取り組みを通して、環境が良くなることで経済効果を生み、地域が経済的に自立できて、住む人が誇りを持てる、というように環境と経済が共鳴する町をめざすものです。

「すべては生命への共感。」

農業は生命への共感のもとに成り立つべきもの。力をあわせてすすめていきましよう」と中貝市長は報告を結びました。

GM食品の根絶をめざして

金川貴博さんによる特別報告、海外からのビデオメッセージに続き、GMOフリーゾーンの取り組みの推進に向けて、有機農業に取組む9人の生産者からのメッセージと消費者としての4人の生協組合員による報告がリレー形式で行われました。グリーンコップからは、第4回交流集会を開いた宮崎県の綾町から綾業会会長の小田さんとグリーンコップ生協おおいだ理事長の奥田さんの報告、グリーンコップ生協みやざき理事長の杉尾紀美子さんが



綾業会会長 小田道夫さん

「実際に圃場を見学するとフエンスで仕切るだけで、環境中への流出も不思議ではない状況です。現在反対署名活動を行っています。宮崎だけの問題ではありません。一人でも多く署名に参加をお願いします。」

ないのに、GM綿を試験栽培する宮崎大学。共同研究するバイエル・クロップ社は未承認のGMイネを流通させており、管理能力も疑われます。



グリーンコップ生協おおいだ理事長 奥田富美子さん

グリーンコップでは2005年から自生GMナタネの調査活動を行っています。グリーンコップ生協みやざきでは綾町の生産者と共にGMOフリーゾーンの取り組みに力を注いできました。

私はこのガーデンピクを玄関に立て「GM作物食べたくない」をアピールしています。これからもグリーンコップ生協おおいだでGMOフリーゾーンの取り組みをすすめていきます。

大会宣言後、次回の開催地を担うグリーンコップやまぐち生協へ開催地旗の授与が行われ、熱いアピール・メッセージが交わされた集会は次の山口へつながれました。

※野鳥や昆虫などの生物が息できる環境

基調報告

食卓から考えよう

生物多様性・GMOフリーゾーン

遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン代表 天笠啓祐さん

先に名古屋市中で開催された「COP10・MOP5の成果と今後の展開」について天笠啓祐さんからの基調報告があった。

内法には含まれていないのが現状。生物多様性の影響評価においても、対象を野生生物に限定して野菜は対象外であり、鳥や昆虫などへの影響評価についても、GM生物が有害物質を出し

済面への影響も大きい。TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)で自由化促進となれば表示の問題も懸念される。GM作物を売りたい多国籍企業にはネックとなるのが日本の表示制度。



パレード

全体会の前に、徳島市駅前通りから会場までの約2kmをパレード。横断幕を先頭に、参加者は太鼓や鈴などの鳴り物にあわせて、車や通行人に、時折立ち止まっては、議員会館や政党事務所前で「NO! NO! GMO!」などのシュプレヒコールをあげた



長の松村理津子さん(中央)。第7回開催時には、『頑固』に向かって発信した



全体会後の交流会で披露された徳島名物阿波踊り。会場内に参加者全員の踊りの輪ができた

第6回 GMOフリーゾーン 全国交流集会 in 阿波

GMOフリー 私たちの1



私はGM技術に取り組む中心的な研究所（通産省）に29年間在籍して、当初からGM技術は危ない技術であるので慎重に扱う必要があると感じていた。今でも強くそう思っている。

GM技術が確立した1973年当時は厳しい制限をかけて閉鎖的空間での取り扱いをしていた。一時中止されたが、安全確保のための指針が出されて実験は再開。開発すると利益が見込めるため、多くの企業が研究に取り組む中で、安全への対策は緩みはじめ、1994年のGMトマトの屋外栽培によって、花粉が飛散して交雑する危険性が生まれた。2008年の神戸大学によるGM大腸菌の違法投棄の問題などからも、私は、GM推進派の危険性には、GM推進派の危険性には

対する認識不足などを問題と感じている。

GM作物は、導入遺伝子を植物細胞へ打ち込む（バクテリウム法）か、植物細胞に感染させる（アグロバクテリウム法）方法で作られる。遺伝子が細胞内の適切な位置に入って、目的の細胞ができるのは数千から数十億個に1個程度の非常に少ない確率である。

GM技術は「ある生物から目的とする有用な遺伝子を取り出して別の生物に導入する技術」という説明が正確である。「遺伝子の一部を切り取る」「遺伝子のある部分に組み入れる」ことはできないし、「遺伝子を置き換える」ものでもない。遺伝子がどこに入るかは分からない。「生物に導入」であるから、マーカーとなる遺伝子を一緒につけてどこに入るのかを確認する必要がある。

そもそも「遺伝子」は、生物の体の中にあるタンパク質の設計図であるDNAの一部。DNAには遺伝子をいつ、どのように働かせるかを書いた部分（プロモーター）がある。それらの働きによって、常時タンパク質の分解・生産がされ、そのときに必要なものが作られている。

一方、GM除草剤耐性ナタネを例にとれば、遺伝子と一緒にこれを動かすプロモーター部分も導入される。プロモーターは、生物本体の状態に関係なく常に遺伝子が働くように組まれている。すると、プロモーターが予定外のところで動いたり、自己増殖などにより「組み換え体」の働きが他の遺伝子に影響しないか、安全性そのものに影響するのではないかなど、さまざまな疑問が出てくる。

DNAについては、まだまだ未解明のことが多い。危険だと分からなくても、予防することが最も重要なのである。

特別報告

遺伝子組み換え技術の問題点

京都学園大学教授 金川貴博さん



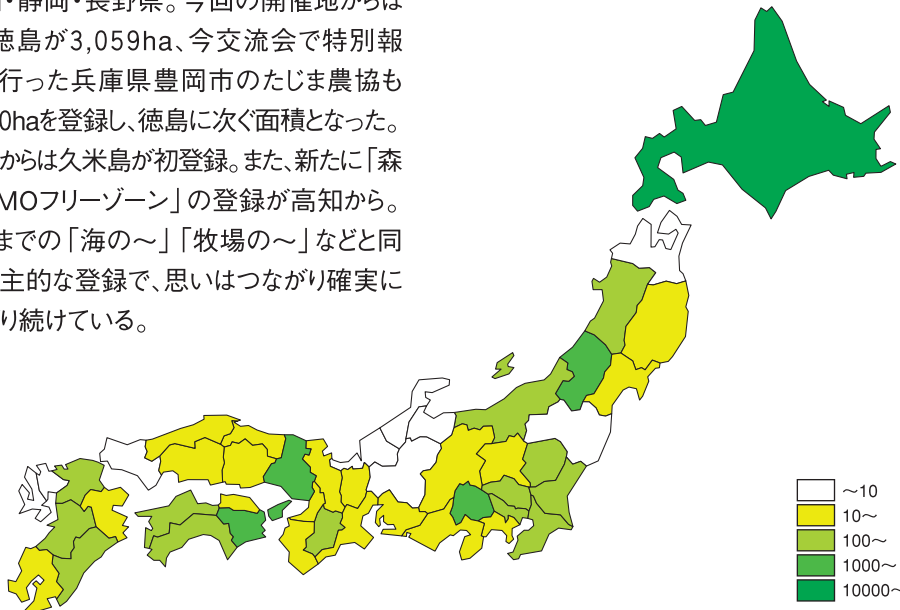
グリーンコープやまぐち生協へ開催地旗を手渡す
開催地旗を受け取ったグリーンコープやまぐち生協理事（右）。「現時点では山口のGMOフリーゾーンの登録は少な張った」と言えるように取り組みを広げていきたい」と会場

日本のGMOフリーゾーン登録状況

(2011年2月10日現在)

全国に着実に広がる GMOフリーゾーン

前年の2月より、21道府県で13,136.73ha増加した。特に目立ったのは兵庫・愛媛・高知・静岡・長野県。今回の開催地からはJA徳島が3,059ha、今交流会で特別報告を行った兵庫県豊岡市のたじま農協も6,000haを登録し、徳島に次ぐ面積となった。沖縄からは久米島が初登録。また、新たに「森のGMOフリーゾーン」の登録が高知から。これまでの「海の～」「牧場の～」などと同様自主的な登録で、思いはつながり確実に広がり続けている。



COP10・MOP5では、GM関連として、GM生物が引き起こす被害（損害）をどこが責任を負ってどのように修復（保障）させるのかを示すカルタヘナ議定書の27条「責任と修復が古屋・クアランプール補足議定書」として採択されたことは大きな成果である。

しかし、各国の対応に委ねる項目が多いという大きな問題がある。EUでは予防原則や生物多様性の考え方において「農業や人の健康」が採用されている。しかし、日本のカルタヘナ国



た時の影響評価だけでよいことになっている。実際的には日本ではGM作物は野放し状態と言える。この法律の目的をふまえると農水省でなく環境省主導で定めるべきだと考える。

GM作物は、日本で明らかにしているGMナタネの自生をはじめ、栽培国では除草剤でも枯れないスーパー雑草や、殺虫農薬を組み換えたGM作物にも死なないスーパー害虫などの発生が問題になっている。そのことで農薬の使用量が増え昆虫が減少して生物多様性を壊したり、GM生物の交雑や混入によって有機農業ができなくなったり、有機認証が取り消されたり、農業への被害が広がるなど経

※1 COP10：生物多様性条約第10回締約国会議
※2 MOP5：カルタヘナ議定書第5回締約国会議

その撤廃に向けて、圧力がかかることも予測される。表示制度がなくなると中身の分からないものを私たちは食べることになる。

私たちは、1日に3度、どんなものを食べるかを考える機会がある。それは生物多様性を守るチャンス。生物多様性と食の安全を守るために、地域農業を発展させ、食文化の多様性を守り、有機農業・環境保全型の農業を広げ、GMOフリーの世界を共に作っていきましょう。



「お米と野菜を食べよう!」スタート集会開催

123人の米と野菜の生産者と 124人の組合員・職員・ワーカーズが出会った!

スタート集会に参加した生産者

米の生産者
山形県から鹿児島県まで
25グループ・62人
精米メーカー2社・3人

産直青果の生産者

島根県から宮崎県まで
33グループ・61人
メーカー1社・2人



「お米と野菜を食べよう!」とアピールする共同体商品おすすめ委員会のメンバー



青果生産者の会の会長
原田幸二さん

「グリーンコープは私たち生産者にとって応援団。生産者として何ができるかを常に問いながら前向きに取り組んでいきたいと思っています。次の世代に何をどう残すのか、組合員とともに考えて、ともに頑張りたいので力を貸していただきたいと思っています」

「お米と野菜を食べて、安心・安全な食べものと日本の農業を守り、健康に生活していきましょう!」を2011年度のグリーンコープ重点方針に掲げて、全単協で取り組んでいくことをグリーンコープ共同体育理事会で確認しました。この取り組みのスタート集会が、2011年2月11日福岡市にて開催されました。たくさんのグリーンコープの生産者・組合員が集い、「お米と野菜を食べよう!」という取り組みの意味とこれまで築いてきた産直のすばらしさを共有し、作る生産者と食べる組合員の熱い思いが改めて出会う場となりました。

今号では、スタート集会のようすを報告します。これからすすめられていく各単協での生産者との交流や利用普及の取り組みなどについて、シリーズで掲載していく予定です。

「お米と野菜を食べよう!」の取り組みスタート

スタート集会には、米と野菜の産地から123人の生産者、全単協の理事長・副理事長・商品おすすめ委員長はじめ組合員事務局や職員、ワーカーズなど124人、精米メーカーやグリーンクラブ代表などの参加もあり、総勢256人になりました。

生産者全員が次々と力強くアピールしました。「安心・安全なお米や野菜が食べられるのは、作ってくださる生産者がいればこそです。生産者ともっと交流して、お米や野菜のよさをみんなに伝えたい」と語りかける組合員と、「食べてくれる組合員の顔を思い浮かべながら安心・安全なものをごんばって作っている。そういう関係が生産へのモチベーションになる。顔が見える関係から、気持ちも通じあえる関係に深化していけたら」と応じる生産者。はじめて米と野菜の

生産者と組合員が一堂に会した集会は、この取り組みに意気込む組合員と生産者の思いで、一体感に包まれました。「今日の出会いをそれぞれの単協に持ち帰って、自信を持って『お米と野菜を食べよう!』の取り組みをしつかりアピールしていきたいと思います。今日の集會を文字通りスタートとして、生産者の皆さんと手を携えてともにすすんでいきましよう」とグリーンコープ生協おおさか理事長中村さんの挨拶でスタート集會は力強くしめくられました。



生産者が集會に持参した米と野菜を使った試食品
参加者は改めてそのおいしさを実感した

おにぎり、ほうれんそうのおひたし、れんこんチップ、ミニトマト、いちご、さつまいものてんぷら、ふかしもちなど

基本方針

「お米と野菜を食べて、安心・安全な食べものと日本の農業を守り、健康に生活していきましょう!」



グリーンコープ連合専務理事
片岡宏明さん

「お米と野菜を食べよう!」というように意識的に取り組もうとしているかということですが、お米と野菜を食べようとか産直の生産者の皆さんとの関係だとか、産直商品を組合員に紹介していくという取り組みはグリーンコープ設立以来ずっと一貫してやってきました。今年それを今更以上、もう一度意識的に全力でお米と野菜の利用を高めることに取り組んでいこうというふうに相談をして今日を迎えています。子どもたちが健やかに成長するように、家族が健康に生活していけるように、

2008年に中国産の食品偽装問題が起きた時に、もう一度組合員と食べもののことについて話しあおうとアンケートを取りました。組合員の多くが「国産」ということをとても大切に思っ

ています。グリーンコープのお米と野菜を好きになつてもらおう。さらにそういうグリーンコープの組合員になりたいと思う消費者の方が増えていくことを発展させていきたいと思っています。

そのために安心・安全な食べものが生産されるように環境を守って、農業を守って、ということがグリーンコープの設立の基本にあります。これまで安心・安全な食べものをちゃんと食べていきたいという素朴な思いから、生産者へも思いを馳せてきました。反農業・反化学肥料にこだわり、農業のあり方を問い、農業の心配のない米や野菜や果物を生産者とともに育てていくという産直運動へ発展していききました。生産と消費のあり方へと視野は広がり、食料の国内自給率を考えるまでになりました。日本の農業を守ろうということでは、皆さん方と産直運動を展開してきています。

グリーンコープのお米と野菜が安心・安全でおいしいのは今日ここに集まっていただいてる生産者の皆さんのおかげです。そして、多くの組合員とワーカーズと職員が生産者の皆さんと交流をして組合員に伝えていく、そのことによって多くの組合員にグリーンコープのお米と野菜を好きになつてもらおう。さらにそういうグリーンコープの組合員になりたいと思う消費者の方が増えていくことを発展させていきたいと思っています。



グリーンコープ生協みやざき理事長杉尾さんより、2010年度生産奨励金260,000円の目録が新富町なたね生産組合の宮本さんに手渡された

◀ グリーンコープ生協ひょうご理事長長沼さんより、2010年度生産奨励金69,360円の目録が大木町なたね生産組合の今村さんに手渡された



カタログGREENの対象商品についているマーク

2011年1月11日、宮崎県新富町役場にて、なたねの生産をしている新富町なたね生産組合に生産奨励金を届けました。生産者からは今年の作付けや他の産地の状況について、グリーンコープの国産なたね油を作り続けている鹿北製油からはなたね油の生産状況、グリーンコープからは国産農産物の取り組み方針やカタログでどのように案内しているかなどを

**1月11日 新富町
なたね生産奨励金贈呈式**
グリーンコープ生協
みやざきからの報告

かつて日本では、畑の肥やしにもなるなたねを盛んに栽培していましたが、50年ほど前から化学肥料が使用されるようになり、安価な外国産なたねの輸入で、国産なたねの栽培はほとんど衰退してきました。現在なたねの国内自給率はわずか0.02%。グリーンコープは国産なたねの栽培面積の拡大、安定供給できるようになたね生産者に生産奨励金を届けました。



なたね・落花生の生産者に 生産奨励金を届けました

紹介し、その後、生産奨励金の目録と、グリーンコープ生協みやざき理事会からの組合員の思いがこもったメッセージを届けました。業種生産部の宮本部会長は「生産奨励金をいただけたとは思っていなかったのですね、とてもうれしいです。景観用作物としてなたねを栽培していましたが、副産物として国産のなたね油がとれ、新たな設備も必要なく、そのまま農地も活用できるという良いことづくめの取り組みだと分かりました。行政の応援もあって、成功例として県外からの視察もあります。2010年度の収量、7haに対し8100kg、そのうちグリーンコープ用出荷分は6500kg。現在、生産者は10人ですが、新たに募集もしています。これからもさらにこの取り組みをすすめていきたい」と挨拶しました。

**1月13日 大木町
なたね生産奨励金贈呈式**

福岡県三潴郡大木町で行われたなたねの生産奨励金贈呈式では、生産者2人、組合員など計23人が一堂に会しました。

グリーンコープ共同体代表理事田中さんより「生産者が継続して生産・拡大することができるよう生産奨励金を届けると同時に、生産者と組合員が交流して

います。今日感じたことを単協で組合員に伝え、なたね油の利用につなげていきたいと思っています」と挨拶しました。

交流会では、なたね生産組合の今村代表より「2008年より生産組合の取り組みがはじまり、生産者3人、2010年度の収量、2.8haに対し3734kg、そのうちグリーンコープ用出荷分は1734kgと、国産なたねの生産がすすんでいます」とスライドを使って説明しました。

グリーンコープ生協とつとり理事長相野さんより、「生産者の方たちにずっと作り続けていただけるように、私たちは国産なたね油をずっと使い続けたいという思いと共に生産奨励金を届けます。これからもずっと安心・安全な国産なたねの生産を続けていただきたい」と生産者へのお礼の言葉を伝えました。

生産者の広松さんは「今回生産奨励金をいただき、大変幸せに思います。これからも組合員の皆さんと交流しながら頑張っていきたいと思っています」と意気込みを語りました。

生産者から生産の苦労やなたね作りにかける思い、組合員が国産なたね油に対する思いなどを語りあい、交流を深めました。

落花生の生産奨励金贈呈式・交流会。組合員、生産者、メーカーなど24人が一堂に会しました。

かつて熊本県は国内消費量の2割をまかなう西日本有数の落花生産地でした。それが安価な中国産におおされるなどして栽培農家が激減。国産を追求するグリーンコープは千葉県産の落花生を取り扱っていました。ところが、2007年に残留農薬問題で中国からの輸入がストップし、国内産落花生は奪い合いになり価格は高騰。そこでグリーンコープでは同年、グリーンコープ生協くまもとが単協開発商品として「熊

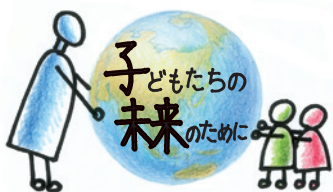


グリーンコープがこしま生協理事長川原さんより、深水さん夫妻に生産奨励金の目録が手渡された

本県産落花生」の開発に着手。2008年には「生産奨励金の仕組みを準備して栽培農家を増やし、2009年には生産者20人、作付け面積4.02haと目標とする作付け面積の4haに達しました。2010年度は生産者20人、作付け面積4.07haとなり、作付け面積に応じた生産奨励金3,256,000円を贈呈しました。

交流会では生産者から「栽培には病気がつきもの。今年は白絹病が発生し、落花生を焼却した。こんなとき生産奨励金は大変ありがたい」と、奨励金がとても役立つているという声があがりました。

組合員からはグリーンコープやまぐち生協理事長松村さんが「グリーンコープは安心・安全に加えて『安定』もめざしている。国内産を安定して組合員に届けることができるのも生産者がいてくださればこそ。皆さんをこれからも応援していきたい」とグリーンコープの姿勢を



No.32

東北地方太平洋沖地震に思う

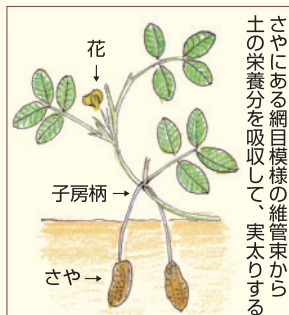
グリーンコープは、みどりの地球をみどりのままに、いのちを育む環境を子どもたちにつなぎ、安心して暮らせる社会を作りたいと考え、原発は「いのち・自然・くらし」を脅かすものとして脱原発に取り組んでいます。

今回の東北地方太平洋沖地震による福島原発での深刻な事態、まったく予想だにしないことだとのコメントがありましたが、そこに「危険物」がある限り、大事故の危険性はゼロではないのです。

あらためて、これまで私たちが取り組んできた、原子力発電所は未来の子どもたちに大きなつけを負わせるものであり、共存できるものではないということを実感しています。

「起こるはずなんてない」ことが起こりました。私たちは、今後も子どもたちの未来のため、原子力発電所のない社会をめざしていきたいと思います。

グリーンコープ共同体組織委員会



述べました。

落花生は4月末に播種、8月頃に子房柄が土に向かって伸び、土の中で繭状のさやになり、実ができてきます。除草剤を使わないため、除草は炎天下の作業となります。落花生栽培では第一人者の石本さんは「暑くても朝早く起きて草取りをします。まわりから『ようやるなあ』と言われるが、熊本のいい落花生をみなさんに届けたいとがんばっています。通常一株から20〜30個の実が取れますが、うちは40個くらいとれます」と誇らしげに栽培のようすを語りました。また、交流会には後継者一人も参加。会場いっぱい拍手を浴びました。

いま地域を考える

No.211

子ども
大好き!料理
大好き!

ワーカーズになります

笑顔を広げたいから…私たち

グリーンコープ生協くまもと 食育の会わくわく



食育の会わくわくメンバーの皆さん
代表の花田さん(前列中央)を囲み、笑顔がいっぱい

2005年グリーンコープ生協くまもとで、料理研究家坂本廣子さんによる「子ども料理教室講師養成講座」が開かれた。この講座をきっかけに食育の大切さを実感したメンバーが、翌年「食育の会わくわく」(以下、「わくわく」)を立ち上げ、5年間で92回の子ども料理教室をグリーンコープ生協くまもとの中で開催してきた。

その活動をさらに広げ、地域とのつながりを確かなものにするため「わくわく」はこの春ワーカーズコレクティブへと進化する。迷いながらも確実に進みはじめた「わくわく」のメンバーに話を聞いた。



メンバー自身も講習を受け練習を重ね、全員が講師・助手・スタッフの役をこなせるようになった



分かりやすい言葉で丁寧に伝えると、子どもはすぐにマスターする

新しい目標に向かう

4月の設立総会に向けて準備も最終段階に入った2月下旬、グリーンコープ生協くまもと本部2階の会議室に「わくわく」のメンバーが集まってきた。月に一度の定例スタッフ会議だ。手に手に自家製のパンやお菓子を抱えている。設立総会後のティーパーティーのメニューを試食検討するためだ。

「この材料で、こんなにおいしくできるんだ!」次の料理教室で子どもたちに披露しよう。一つの食べものから次々に意見が飛び交い、誰かに伝えようと意気込みがあふれる。

組合員になった年数やそれまでの職業もさまざまなメンバーは「子どもが好き、食べものが好き」、この2点が共通項。「活動をはじめた頃は、ワーカーズになるなんて考えてもいませんでした」。代表の花田さんは、今までの道のりを振り返る。

経験からうまれる

「わくわく」がこれまでの5年間に開催した92回の子ども料理教室には延べ1000人を超す子どもたちが参加。グリーンコープ生協くまもと全37地域で子ども料理教室を開催するという自分たちで掲げた目標は昨年度中に達成できた。これがメンバーの喜びになり、大きな自信につながった。

さらに「わくわく」メンバーをワーカーズ化へと大きく動かしたのは、八代市の配食ワーカーズ「パセリ」の活動だった。い草加工場だった古い家屋にキッチンを設置することからスタートし、工夫して調理した惣菜を弁当にして登録者のところへ届ける。弁当を受け取る時の高齢者の笑顔や言葉が活動を支えていると語る先輩ワーカーの姿に、「わくわく」メンバーの心は大きく動いた。

「わくわく」を動かすもの

「料理をはじめめる前、泣いたりすねたりしている子ども最後にはエプロンつけて笑顔になります。はじめは大泣き、帰りはスキップ。その笑顔がメンバーを動かすエネルギーになっています」。料理教室を開くたびに、子どもの持つ力をあらためて実感しているという花田さん。自身が子どもの頃、祖母のそばで手伝いをしながら覚えた料理は「財産」と言う。

2011年2月の組合員数 399855人 (2/20現在)					
リユース リサイクル データ 2011年1月分	牛乳びん		フード マイレージ 2011年2月までに組合員の利用によってたまったのは 88,681,535.5 poco CO ₂ に換算して8,861トンを削減したことになります		
	回収本数	624,294本			
	回収率	97.5%	アジア民衆基金 2011年2月までに組合員の利用によってたまったのは 14,605,540円		
	(12月19日～1月15日回収分)				
リユースびん	トレー				
	回収本数	131,128本			
	回収率	62.7%			
	回収率	60.4%			
モールドパック	仕分け袋				
	回収重量	31,200kg			
	回収率	110.5%			
	回収率	6.1%			

放射能汚染測定結果報告(208)

2011年1月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計 ベクレル/kg
※ レモン	熊本県	ND	ND	ND
※ アーモンド(アーモンドチョコ)	アメリカ	ND	ND	ND
※ カシューナッツ	インド	ND	ND	ND

グリーンコープの
ワーカーズ
コレクティブとは

一人ひとりが出資・経営し、労働を担う新しい働き方。暮らしやすい街にするため、多くのワーカーが各地域で活動の輪を広げている。

グリーンコープ内の
主なワーカーズ

福祉関係ワーカーズ
高齢者の介助・介護など。託児や産前産後の手伝いなど子育て支援にも取り組む。

食事サービスワーカーズ
安心できる食材を調理して利用者に届ける。

共同購入ワーカーズ
個配や班配など組合員への商品の配達などを担う。

食品店舗ワーカーズ
組合員と店舗との連携を深め、活気ある店舗作りに取り組む。

家計と暮らしのワーカーズ
家計管理やライフプランの学習会を開き、組合員の暮らしを応援する活動をすすめる。

さあ、新しいスタート

5年間の経験をもとに、地域へ開かれた食育活動をするためにワーカーズの設立に向かって踏み出した「わくわく」。事業として運営し

子育てや介護など、さまざまな体験をとおして食べものを見つめ直してきた。「仕事に追われ食事がおろそかになっていった時期もありました。でも、そんな時期があったからこそ、食べものの大切さを、あらためて実感できています」とメンバーの森崎さんは言う。

長いウォーミングアップは終わった。食育ワーカーズ「わくわく」はスタートの台図とともに、子どもたちへ、地域へと向かう確かな一歩を踏み出している。